語り継ぐ 平和への想い
～戦後70年を迎えて

終戦から70年 ――――

かつて日本は、諸外国との激しい戦争を繰り返し、大勢の犠牲者を出しました

過酷な時代を生きた人たちは高齢化が進み、当時のことを語れる人は少なくなってきています

今回の特集では３人の方から戦争に関するお話を伺いました

戦争を風化させることがないよう、改めて平和の大切さを考えてみましょう

母子で必死に逃げた

夫は戦地へ

夫は昭和16年に召集され、満州に行きました。しかし、夫は帰っては来ませんでした。出征した頃、次男はまだ私のお腹の中でした。夫は、満州での戦争の後、満州からフィリピンに移動するため輸送船に乗り、その船が攻撃され、それで亡くなりました。その時に生き残った方の話によれば、船に乗った時はみんなが「帰れる」と喜んでいたそうです。

枕崎が焼野原に

枕崎大空襲の時、私は現在の東本町に住んでいました。今はお店が並んでいますが、当時は住宅がほとんどでしたね。夫が出征してからは、夫の両親と息子２人の５人で暮らしていました。

７月29日は、朝起きて、子どもに服を着せているときに機銃掃射がありました。そして焼夷弾が落ちてきて、周囲の家などが火事になり、義父と義兄と長男と私の４人でバケツに水を入れて火を消そうとしたけれど、とても間に合いませんでした。周囲は火が燃え広がる中、神園川に小さな布団を持って逃げ、長男と次男と私の親子３人で頭から布団をかぶって落ち着くのを待っていました。時間的にはそう長く攻撃を受けた記憶はないですね。あっという間に枕崎の町は焼野原でしたが、幸い、自分たちの家は焼けずに済みました。その後は、山口地区のはずれにある知人の家に避難しました。その日以降も「今度は上陸してくるんじゃないか」とみんな心配していました。

平和な世であってほしい

戦争は嫌ですね。若い人がまた戦争に行くような世の中にはなってほしくないですね。

畠野ウミさん（山手町・100）

自分の経験を語り継ぐ

私が戦争体験談を立神小学校で話をするようになったのは約16年前。立神校区の子どもたちに、ふるさとのことをもっと知ってもらおうと青少年育成講座として始めました。「太平洋戦争と終戦後における児童生徒の生活と学習の様子」という題目で、太平洋戦争が始まった昭和16年から戦争が終わった20年頃、そして終戦後の昭和20年から23年頃に子どもたちがどのような生活をしていたか、どのような学習をしていたか、立神校区の様子を中心に話をしています。

戦時中・戦後の様子

戦時中は、男親は招集されて家にいないから、家のことは母親が中心となって、子どもも家の手伝いをしないといけないような時代でした。小学生の頃は、学校から帰ってきたら畑の仕事や家畜の世話を大人と一緒にしていました。だから勉強は、昼間は忙しくてできないので夜にしていました。空襲が激しくなると、家で生活はできず、山手や山林、別の土地に行き、蚊帳を張り、ゴザを敷いてそこで生活していました。当時の立神小学校は、立神尋常小学校という名称で、建物は木造でした。正門は東側にあり、階段を30段くらい登って正門を通ると、天皇陛下の写真を飾ってある奉安殿というのがあり、そこに一礼をしてから教室に行きました。毎朝全校朝礼があり、朝礼の時には、まず奉安殿に一礼し、天皇陛下がいらっしゃる東（東京）の方に一礼してから始まりました。制服はなくて、靴もなく、霜の降るような寒い日も裸足でした。当時は暁部隊という兵隊さんたちが校舎を拠点にしていたので、１年生から４年生までは学校にいたけど５・６年生は学校にいられないから、春日鉱山の広い事務所を学年ごとに板で区分けをして、そこで勉強をしていました。勉強ができるのは午前中だけで、あとは畑で戦争の訓練をしたり山を畑にして麦や粟、ソバなどを植えていました。学校から約２・５キロメートル離れた畑まで堆肥を入れたカマスを背負って行き、作物を育てていました。作業の間も空襲が来ては、山や橋の下に逃げ込んだりしていました。春日鉱山の事務所付近は、当時、松並木になっていて、私はよくその陰に隠れて火之神の沖を見ていました。ある日、貨物船だったと思うけど、それが攻撃を受けて沈没して、立神岩より高い波柱が立ったのを覚えています。

立神校区の産業は、農業が中心でした。あと鰹節製造工場が数件。焼酎製造工場もありました。それと赤水（枕崎と坊津の境）の西上に大きな精錬所があって、春日鉱山からケーブルを使って鉱石を運んでいましたね。商店は２、３件あったかどうか。

終戦後は、食べ物や生活に必要な物資が不足して、配給も少なく、家族で分け合うので、腹いっぱい食べられず、ひもじい思いをしました。やっと靴を履けるようになったのは高校生になってからでしょうか。当時は貧富の差が大きくて、学校に行きたくても行けない人がほとんどでした。孤児も多く、靴磨きなどをして生計を立てる子どもたちもいました。私の同級生でも、小学校を６年生で卒業したらカツオ船の船員になったりする人が多くて、進学する人はごくわずかでした。

私の戦争体験談

昭和20年３月18日、枕崎は初めて爆撃を受けました。金山以外の地域はほとんど爆撃を受けていたと思います。

枕崎が空襲を受けた７月29日の朝は、私は現在の大塚公民館にラジオ体操に行っていました。その帰りにサイレンが鳴りました。家の近くには、春日鉱山のダイナマイト倉庫があって、そこには当時、通信兵がいました。私はサイレンを聞いて、その場所に急いで行きました。そして、そこに入ったと同時に、鉄砲の弾が飛んできました。扉が鉄でできていたので助かりました。攻撃が収まった頃、私は扉を少し開けて外を見ると、低空飛行していた飛行機に乗っている人がハンカチを振っているのを見ました。おそらく飛行機は、火之神方面から枕崎市街に飛んで攻撃し、また火之神の方へ戻ってきて、赤水方面を回ってまた枕崎市街を攻撃してとその繰り返しだったのだと思います。あと、その時の空襲で焼けた木の棒が、春日近辺まで飛んできたのも見ました。

８月１日にも焼夷弾が落ちてきて、塩屋や牧園方面は何軒も家が焼かれていました。

もっと知ってほしい

私は今、戦争体験談を立神校区で話をしているけど、他に話をできる人がいなくなっています。だから、私の体験の話をCDに保存しました。私が話ができなくなったり、誰も話をする人がいなくなったら、このCDを使って子どもたちに聞かせてくださいと言っているんです。

ふるさとを知ってもらうという意味でも、子どもたちにもっと興味を持ってほしいですね。子どもだけでなく大人にも知ってもらいたい。昔のそういう出来事があって、今の生活があるわけですから。

宗前信夫さん（大塚中町・82）